

ホームレスの対抗的公共圏の可能性の検討
——ストリート・ペーパーを事例として

八鍬加容子

主論文要旨

本論文はホームレス状態の人々が販売者を務めるストリート・ペーパーという対抗的公共圏がどのように生成・展開するのかを分析、考察することを目的とする。そこでどのようにホームレスの人々と市民とが出会い、その出会いが市民の意識を変容させ、立場を超えて新たな社会構想の芽となるようなアイデアを共有しうるのかを参与観察、聞き取り調査、誌面分析により得られたデータをもとに考察した。

本論文では公園、路上などで野宿する人々を「野宿者」と呼び、野宿ではないものの安定した住環境を持たない人々を「広義のホームレス状態にある人々」と呼ぶことにする。また、両者を合わせて「ホームレス状態にある人々」「ホームレスの人々」と呼ぶ。

これまでの寄せ場・ホームレス研究は、主流派社会のイメージや構築される「ホームレス問題」に時に抗い、時に同調するようにも変遷を遂げてきた。そして、「抵抗の主体」や「包摂の客体」として〈他者〉であるホームレスの人々を理解しようと努めてきた。だがそのように〈他者〉としてホームレスの人々を理解しようとする研究枠組み自体が、意図せずに寄せ場労働者、野宿者、ホームレス状態にある人々を「彼ら」と〈他者化〉する視点を再生産してきた側面もあるのではないだろうか。

というのも「抵抗の主体」としてのホームレス像は主体性や抵抗を強調するあまり「彼らの問題」のために主流派社会に対抗していると問題が矮小化され、自己責任論に絡め取られてしまう可能性がある。また「包摂の客体」としてのホームレス像では、当事者の持つ行為主体性が後景化することで、当事者を単なる救済の対象とみなしてしまうからである。

そのような問題意識のもと、本論文においては「ホームレスの人々が同じ社会の市民であるということ、つまり〈他者〉ではないということはいかに主流派社会の方が気づき、意識が変容できるか」というように問いの焦点を主流派社会の方に移すことを試みた。

そのように問いの焦点を移すことの意義には、「家族」「仕事」をめぐる状況の劇的な変化を遂げているという時代も関係している。例えば1990年に881万人だった非正規雇用者数は、2021年に2,064万人と2倍以上となり（厚生労働省 2021）、また50歳時未婚率を見ると、1990年には男性の5.6%、女性の4.3%だったのが、2020年には男性の25.7%、女性の16.4%となっている（総務省統計局 2020）。

従来型のシステムが構造を変えないまま縮んで小さくなり、そのシステムには入れない人々が「安定した雇用」「安定した家族」の外側に取り残されてあふれている。つまり、包摂する側の社会ももはや安定的なものではなくなり、大きなリスクを抱えたものになっているのである。

一方で、そのような主流派社会が揺らぐ時代においては新たな紐帯のあり方が見られる可能性もある。つまり、ホームレス状態に陥る苦境を市民が地続きで考え、新たな社会構想

を生み出す素地も生まれる可能性が高まっていると考えられる。

だがそのためには、生の不安定性が不平等に配分されていることに主流派社会がホームレスの人々の声によってまず気づくことが必須である。だが、それはいかにして可能なのだろうか。本論文ではその点に焦点を当てて、ストリート・ペーパーという対抗的公共圏の生成と展開を分析・考察した。

まず第Ⅰ部では、ホームレスの人々をめぐる状況を把握するため、福祉施策やマスメディアにおける表象を確認した。そのために第1章では、EU、米国、日本の福祉国家の変容とホームレスの人々への包摂策の変遷を確認した。その結果、経済危機とポスト産業化が進む中で福祉国家が揺らぎ、福祉レジームの別を超えて新自由主義と共振し始めており、ホームレス施策にもその影響が及んでいた。

続く第2章においては、日本において主流派社会がもつホームレスの人々へのイメージがどのような変遷を遂げてきたのかを知るために『朝日新聞』におけるホームレス表象を分析した。結果、ホームレス表象には「事件の被害者・加害者」「公共空間の占拠者」「被支援者」といったカテゴリー化に基づく〈他者化〉が見られた。その〈他者化〉の様相は、既に失業の急増や不安定な職業状況にあった2000年代初頭においても見られた。その後、数年遅れてホームレスの人々へ共感を示すような「降格する貧困」の特徴が見られた。

第Ⅱ部、第Ⅲ部では、日本のストリート・ペーパーである『ビッグイシュー日本版』に焦点を絞って分析を行った。特に第Ⅱ部（第4、第5章）においては言説、第Ⅲ部（第6、第7、第8章）においては日常実践をそれぞれ分析した。

第3章においては、本論文の対象であるストリート・ペーパーがどのような経緯で誕生したのかをまとめ、先行研究についても検討した。結果、海外のストリート・ペーパーにおいては対抗性と公共性のバランスが各紙・誌によって異なっており、それは当該社会の人々の意識やストリート・ペーパー関係者の考え方などの影響を受けた動態として存在していた。また先行研究においては、ストリート・ペーパーの言説と日常実践をともに検討したものはなく、本論文ではその両者を分析し、考察することで、対抗的公共圏の生成・展開について考察を深めていくことを確認した。

第4章においては、『ビッグイシュー日本版』における国内のホームレスの人々のライフストーリーのコーナーと読者投稿欄を合わせて分析することで、言説のレベルでどのように対抗的公共圏を生成・展開してきたのかを捉えた。結果、ライフストーリーにおいても社会構造を描き、販売者の行為主体性に着目した語りは効果的に読者に届いていたが、現状の福祉施策や就労支援策への疑念やオルタナティブな自立観はうまく受け入れられていなかった。

第5章では、『ビッグイシュー日本版』に掲載された欧米のストリート・ペーパー販売者のライフストーリーを分析することで、そこで語られる「降格する貧困」の時代を生きるホームレスの人々がどのような対抗的な自立観を語り、そこでの語りが対抗的公共圏においてどのような意味をもちうるのかを分析した。海外の販売者のライフストーリーにおいて

も、第4章同様社会構造や販売者の行為主体性が描かれていた。とりわけ自らの「傷つきやすさ」に応答してくれるようなケアの倫理が織り込まれた関係性が描かれており、そのライフストーリーにより、ストリート・ペーパーという場の性格が再帰的に確認され、構築されていることが示唆された。

第Ⅲ部では、関係者への聞き取りと参与観察により、ストリート・ペーパーにおいてどのような日常の実践が行われ、それがどのようにホームレス状態経験者と市民との間で対抗的公共圏が生成・展開する契機になったのかを考察した。

第6章では、市民がストリート・ペーパーという対抗的公共圏に関わるようになった契機を読者50人への聞き取り調査から探った。結果、公共空間における雑誌売買を通じた販売者との出会いと、彼らの語るライフストーリーに反映された社会構造のいびつさと自らも抱える生の被傷性への気づきがさらに深く活動に関わる契機となっていることがわかった。

第7章では、販売者の「出戻り」という行為がストリート・ペーパーの包摂策を変容させた事例を取り上げた。この事例から、組織の包摂策を変容させる日常の実践が受け入れられるか受け入れられないかに、対抗性を保持しながら活動を続けていけるかどうかがかかっていることを確認した。

第8章では、ストリート・ペーパーで行われているクラブ活動に焦点を当てて、ホームレスの人々と市民とがともに余暇を楽しむことにある対抗性について考察した。結果、労働者／失業者ともにたゆみなく自己資本を高めることを要請される新自由主義と共振したポスト産業化社会において、ホームレスの人々と市民とが敵味方関係なく応援し合うフットサルの場が競争原理とは異なるルールが適用された一種のアジュールとなっていることを確認した。

第9章では、販売者と市民との間の「呼びかけ」と「応答」という日常実践の事例を取り上げ、他者の「傷つきやすさ」に応答し責任を引き受ける関係性からどのような「ホームレス問題」や新しい社会構想が立ち上がるのかを見てきた。結果、〈他者〉との出会いによって自らの身体のもつ被傷性を「思い出し」、その呼びかけに応じる中で近代的主体を軸とした社会とは別様の新たな社会構想の芽が垣間見られた。それは例えば、理由が問われずに他者の被傷性に応答したり、被傷性から生まれる協働に着目したりしたものであった。そしてホームレス状態に陥っても呼びかけへの応答があり、生き延びることができるかどうか「ホームレス問題」として認識されていた。そのような、ホームレス状態にあっても呼びかけへの応答がある様を目撃することで、市民の方にも社会への信頼の取り戻しがあった。

以上見てきたように、寄せ場研究やホームレス研究においては「抵抗の主体」や「包摂の客体」として〈他者〉であるホームレスの人々を理解しようと努めてきた。だがそのように〈他者〉としてホームレスの人々を理解しようとする研究枠組み自体が意図せず、寄せ場労働者、野宿者、ホームレス状態にある人々を「彼ら」と〈他者化〉する視点を再生産してきた側面もあるのではないだろうか、というのが本論文の問題意識であった。

そのため本論文では問いの焦点を主流派社会の方に移し、ホームレスの人々が同じ社会

の市民であるということをいかに主流派社会の方が気づき、意識が変容できるのかということ問いとして設定した。

そして社会構造のひずみや自らの生の被傷性に気づくために、ホームレスの人々との出会いは大きな役割を果たすと考えられるが、出会い方も重要であることがわかった。「支援」の現場に赴いて助けるという出会い方ではなく、生活圏で雑誌販売や余暇の共有といった形で出会うことで、ホームレスの人々を単なる救済の対象とみなすまなざしは和らぐ。そのような出会いの後に、ホームレスの人々のライフストーリーに刻印された社会構造のいびつさや自らの生の被傷性への気づきがあり、彼らの問題は私たちの問題でもあるという地続きで考える素地ができる。そして「問題」はホームレスの人々をいかに矯正して社会へ包摂するかではなく、主流派社会のひずみを修正していかにともに生き延びることができるかと反転する。

そのような「メタモルフォーゼ（変身・変異）」を伴いながら、生活論的視座に立ちホームレスの人々の呼びかけに応答するという日常的実践を繰り返す中で、新たな社会構想が生まれていく。

それは一見、効率が悪い回り道のように見える。だが、新自由主義的な権力が分子のように個人の生活に浸透しているポスト産業化社会において、これらの集合行為の形態は日常生活のなかの個人の体験と強く結びついているため一見するととても弱々しく、社会の構造やその政治的意思決定などにはほとんど影響を及ぼさないかのように見えるが、実際はその見かけの弱さこそが対抗する最も妥当な方法と言える。

近代は私たちに依存を忘却させ、一人ひとりが自立した個人であるという虚構のもと社会を成り立たせてきた。そして「自立していない」とされる人々を〈他者〉とみなすことで主流派社会が形づくられていた。

寄せ場研究やホームレス研究における「抵抗の主体」や「包摂の客体」と言った表象は期せずしてそのような近代の虚構に加担してしまう。だからこそ近代の虚構が揺らぐ今、どのような施策、規範や表象がホームレスの人々を〈他者〉として構築しているのかを主流派社会が気づくことから、新たな主体像、ひいては新たな社会構想が生まれうる。

近代の大きな物語が揺らぐ「降格する貧困」の時代に生きる私たちは、第1章の福祉国家の変遷を見る限り「アントレプレナー的主体」を築くことによってさらに個々の資本を高めて生き延びる道を選ぼうとしている。だが、私たちの身体の有限性を忘却した構想は持続可能とは言えないだろう。

〈他者〉と出会い、「忘却」した私たちの身体が持つ被傷性を「思い出し」、被傷性がさらけ出された〈他者〉からの呼びかけに普段の生活の中で応じる中からしか近代という虚構に気づき、新たな社会を構想する動きは生まれてこないのではないだろうか。

本論文においてはストリート・ペーパーという対抗的公共圏をフィールドにホームレスの人々と市民とがどのようにともに活動を展開しているのかを分析・考察してきた。当事者のライフストーリーから社会構造のいびつさと自らの生の被傷性に気づくことで、新たな

社会を構想する芽は見られたが，そこからどのように実際に社会構造のいびつさが正されていくのかについては本論文では考察できなかった．今後海外のストリート・ペーパーの事例なども参照しながら，この点について考察を深めていきたい．